

# 「市民の口癖になる未来ビジョンをつくりたい」 ワクワクで市民を巻き込みながら進める、 七尾版ローカル **SDGs**

## 環境省ローカル **SDGs** 地域循環共生圏セミナー 第2回講演編 開催レポート

地域循環共生圏づくりプラットフォーム構築事業では、地域の環境・経済・社会を元気にしたいと考える人たちが、一步を踏み出す「きっかけ」や「学び」を得るためのセミナー「環境省ローカル **SDGs** 地域循環共生圏セミナー」を開催しています。

第2回講演編では、のと共栄信用金庫 ふるさと創生部 次長 入口 翔さんをお招きし、『地域が盛り上がり、協働する仲間が増える「対話の場」のつくり方』をテーマにお話いただきました。

その内容をレポートします。

### 入口 翔 (いりくち・しょう) さんプロフィール

- のと共栄信用金庫 ふるさと創生部 次長
- 大学を卒業後、のと共栄信用金庫に入庫し、2014年より中小企業庁へ出向
- 2018年に、のと共栄信金に復職し七尾市に1ターン。その後、七尾商工会議所地方創生ディレクターを兼任、2021年より七尾商工会議所 **SDGs** プロジェクト推進室長に着任。2023年3月末に出向期間満了となり、同年4月より現職。現在は大学院で地域創造学を専攻。

## 地域内経済循環を促進することで地域の持続可能性に貢献する、信用金庫の役割

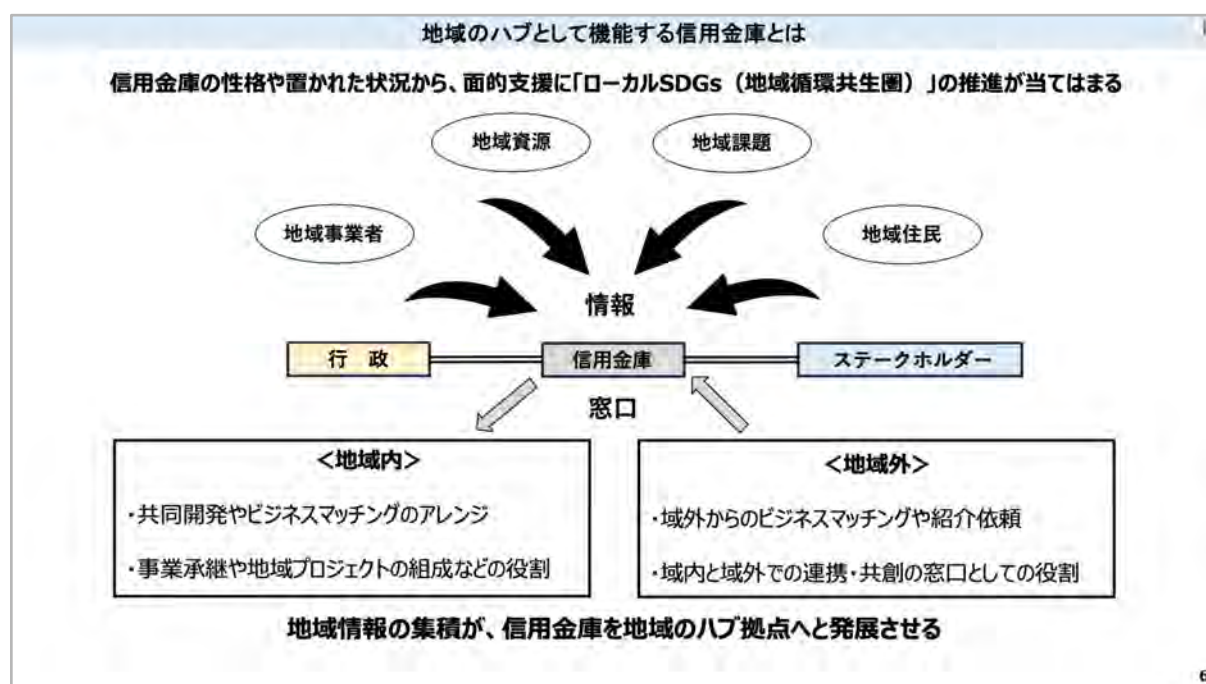
今回のテーマは、『地域が盛り上がり、協働する仲間が増える「対話の場」のつくり方』です。七尾でたくさん取り組んでいるテーマなのですが、これからお伝えすることは泥臭いことばかりです。

私は、現在は信用金庫の職員として地域の仲間たちと地方創生の取り組みを行っております。ずっと信金の職員として生きてきたわけではなく、ほとんどの期間、外部組織に所属して地域内外の人と協働しながらやってきました。

私たち信用金庫が地方創生に取り組む理由は、持続可能な地域を築くことが信用金庫の経営にも密接に関わっているからです。能登地区の場合、現在の延長線上で考えると、21年後には人口や経済が50%ほど縮小する見通しがあります。

このような状況において、金融庁の監督指針に基づき、私たち中小地域金融機関は、地域密着型金融のビジネスモデルを確立し、地域全体の再生に積極的に参画することが期待されています。また、信用金庫協会の2021年からの3ヶ年計画でも、地域社会の課題解決支援が最も重要な課題の一つと位置付けられています。

簡単に言えば、信用金庫は特に経済的側面での地域内循環を促進し、地域の持続可能性を高める使命を担っています。「面的支援業務」を行うことで、地域の情報が集まるハブ拠点のような存在になることを目指しています。



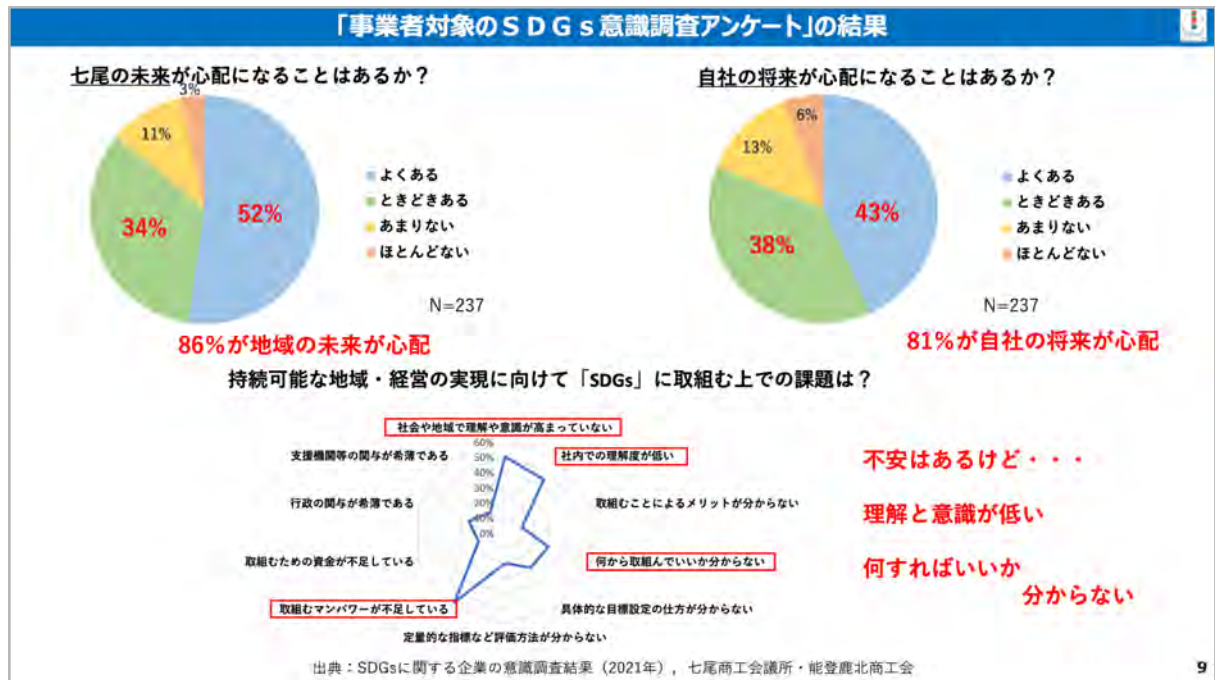
## 市民の意識を知ることからスタート。事業を支援する手前の【土壌づくり】から始めることにしたワケ

なお SDGs スイッチは、七尾市の地域循環共生圏構築に向けたプラットフォームです。産学官金民9組織が参画しています。

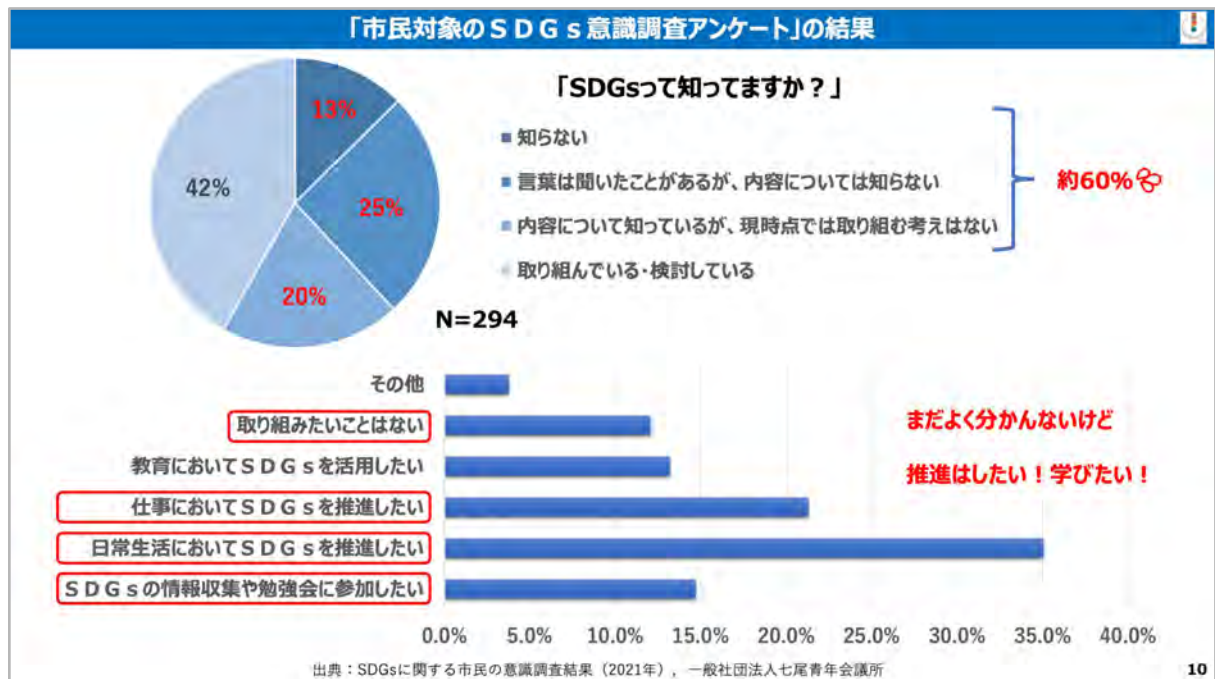
事業者の経営支援をすることを目的に動いていたのですが、そもそもの地域の現状を知らないことには経営支援はできないと考え、まずはエビデンスの収集から取り組み始めました。

株式会社帝国データバンクが公表している SDGs に関する企業の意識調査（2023年）によると、「SDGs に積極的」である企業は、大手企業で2020年の24.4%から53.6%に、中小企業でも22.1%から50.4%まで上がっており、関心が高まっています。

一方で、七尾商工会議所・能登鹿北商工会が行った、SDGsに関する企業の意識調査（2021年）によれば、七尾の経営者のうち8割以上が、七尾の未来と自社の将来に不安を感じていますが、具体的な行動に移すことができていないという結果が出ています。この背景には、地域や社内での理解不足や、マンパワー不足があります。

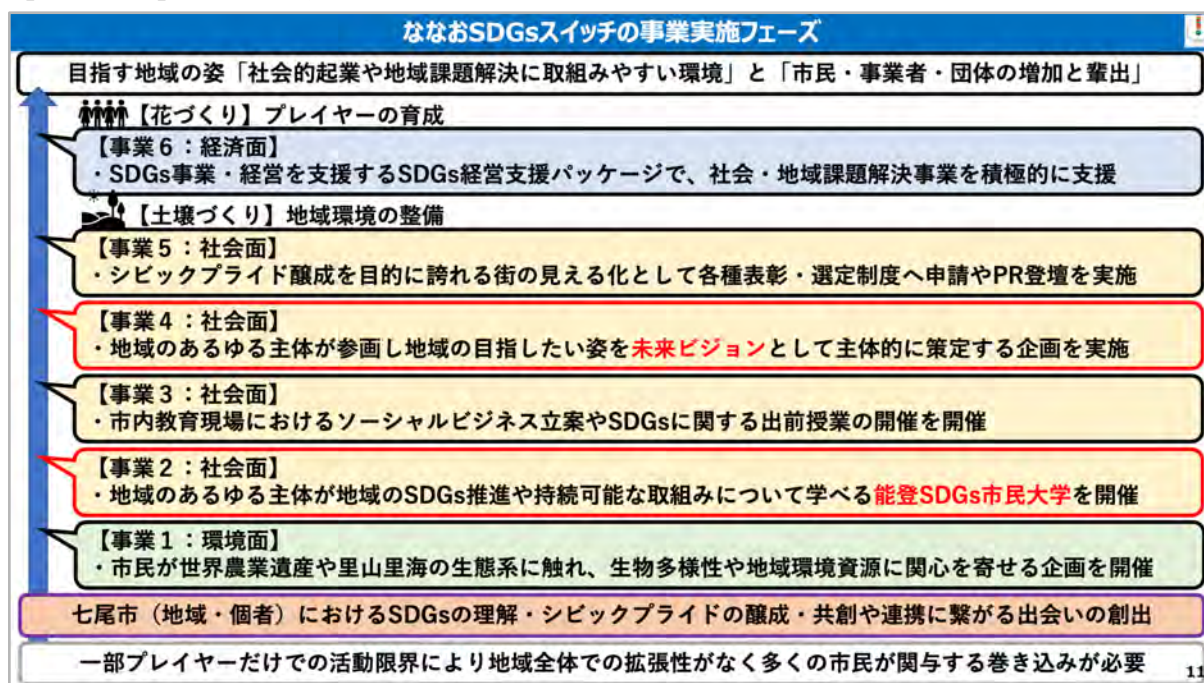


一方で、市民に対する調査では、SDGsに対する理解は低い一方で、「生活や仕事においてSDGsを推進したい」という意欲や、「勉強したい」という意欲は高いことが明らかになりました。



こうした結果を踏まえ、なお SDGs スイッチでは、SDGs に関する経営支援メニューを提供する前に、まずはその【土壌づくり】として地域の意識を高めることに取り組むことにしました。事業者と市民の SDGs への意識と理解が高まることで、経済面での支援の手前の段階として不可欠だと認識したからです。

SDGs の理解促進、シビックプライドの醸成、競争や連携を促進する場づくりなどを経て、【花づくり】として経済面の支援フェーズに入ることになっています。



なお SDGs スイッチの取り組みは結局すべて「ひとづくり」に繋がるわけですが、そのポイントはこの3つだと思っています。

- 地域のみならず、地域の未来を担っていくカタチが理想モデル
  - 一部の地域団体や行政、支援機関だけでは続かない。限界がある
  - 地域を想う市民を育成・輩出
- 「知識層」や「ガッツリ層」だけでなく、無関心層が地域に関心を持つ
  - 地域のヒトゴト率 < 地域のジブンゴト率
  - 地域のために何かしたい市民増加
- 各々がマイペースに、無理のない範囲で、少しずつ自由参画できる地域
  - 参加や頑張りを強制されない。楽しい。気持ちが良い環境。弱い紐帯。
  - 地域のために何かしたい市民増加

ポイントは、あらゆる市民の方、事業者さんを巻き込んでいくことです。

## 地域の多様な人材が集まり、共に学ぶ「能登 SDGs 市民大学」

ここからは、具体的な取り組みとして「能登 SDGs 市民大学」についてお話します。

「能登SDGs市民大学」は、地域のあらゆる方々が一緒に学生になり、SDGsや持続可能なまちづくりについて学べる場です。市長に学長に就任していただき、様々なカリキュラムを開講してきました。

第1期は190名の方、第2期も141名の方に参加いただきました。受講生アンケートの結果としては、受講満足度：98%・リピート希望率：91%・お勧めしたい率：90%という、素晴らしい結果を出すことができました。

これだけたくさんの受講者に参加してもらえた要因は、経営者や市民へのアンケートからつかんだ「SDGsやこの地域のために何かしたいけどどうすればいいのかわからない」というニーズに完璧にハマったからだと考えています。

みんなでゼロから学べる、抵抗感なく強制されることなく学びに行ける環境であることや、講師の皆さんの魅力をしっかりと告知で伝えることも意識しました。講師は、SDGsスイッチの参画組織のネットワークをフルに活用して探しました。市民の皆さんの「こんな人の話を聞いてみたい」にもなるべくこたえるようにしています。

受講者の年齢層は、10代の高校生から70代までと、幅広いです。属性も、経営者・サラリーマン・おばあちゃん・移住者の方・行政職員と、本当に多様です。



また、これと並行して若年層向けの取り組みとして、地域の学校の先生方と連携して、SDGs出前授業の開催も行っています。

地域内でSDGs経営に取り組んでいる経営者さんを先生役として引っ張ってきて、自分の企業での取り組みを紹介してもらっています。子供たちにとっては、「こんな面白い大人が自分の生まれたこの地域にはいるんだ!」という気づきにも繋がります。「こんな面白い地

域なら時々帰ってきてみたい」「将来この地域のために何か自分でできることをやりたい」  
そう思う学生がひとりでも増えると良いなと思っています。

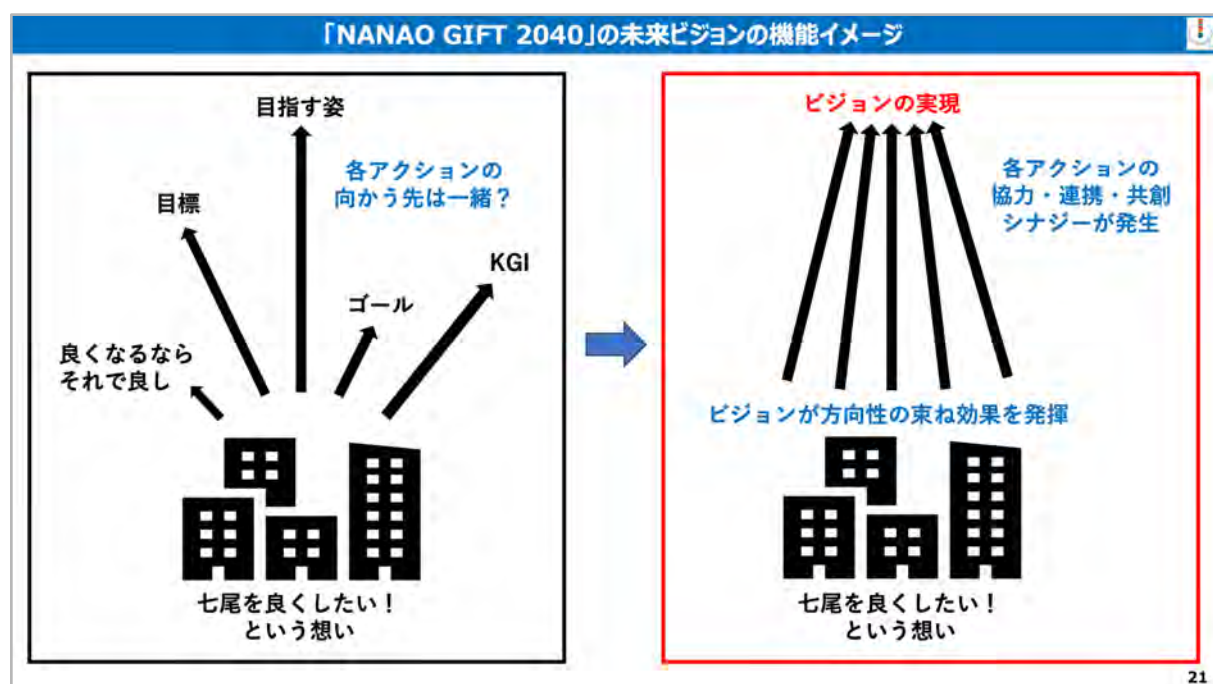
今は、SDGs 市民大学のサードシーズンとして、地元の高校生たちとの取り組みをスタート  
しています。今回はただインプットするだけではなく、高校生が主体になって事業をつくる  
ことを目指しています。今日も授業だったのですが、「君たちが地域に入ってめちゃくちゃ  
調査した結果が、事業化されるんだよ」ということを伝えたところ、みんなキラキラしなが  
ら熱心に参加してくれました。

## なによりも市民の皆さんにワクワクしながら参加してもらうた めに。未来ビジョンづくりの表舞台と裏舞台

次に、地域の未来ビジョンづくりについてお話しします。

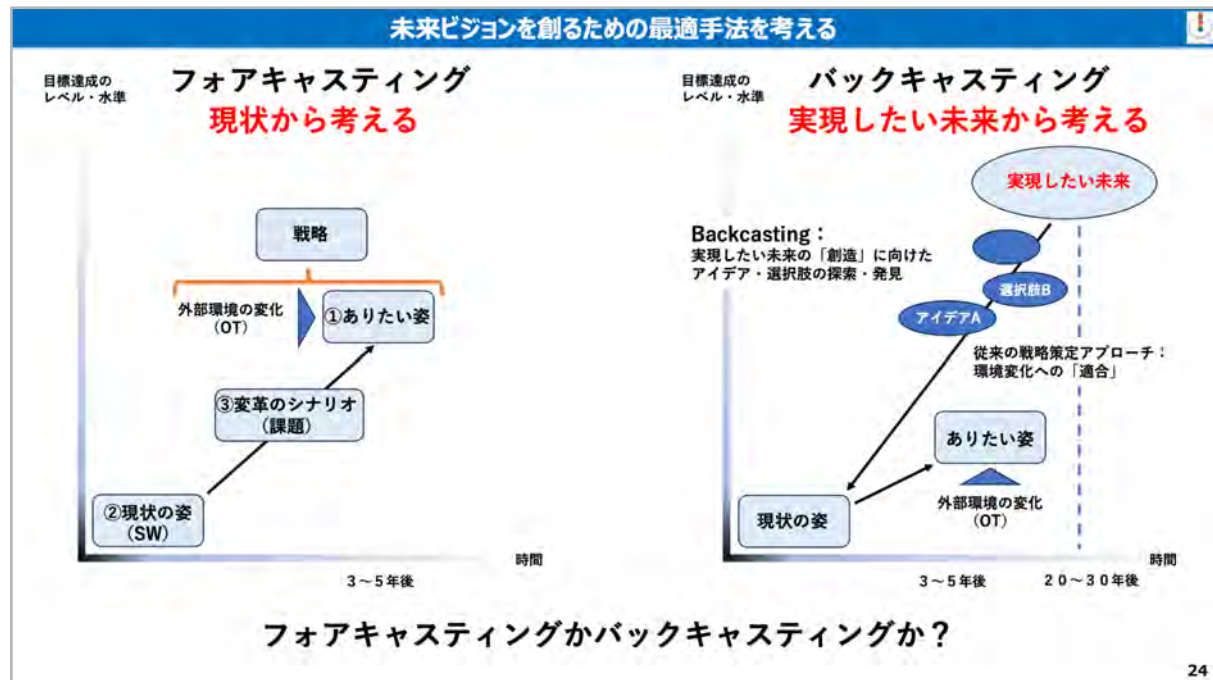
七尾市では、新型コロナの前に大型商業施設が倒産したり、新型コロナによって中小企業や  
観光業にも影響が及んだりしており、経済的に停滞していました。街全体にどんよりとした  
閉塞感が漂っていたと思います。

この状況を打破すべく、熱意ある地域の先輩方や他の団体と協力して活動を始めようとしま  
した。しかし、みんな「七尾市を良くしたい」という思いは共通しているものの、どうなる  
ことが良い状態なのか、いつまでにその状態を目指すのか、どう進めるのが良いのかなど、  
目線が揃っていませんでした。こうした状況の中、異なる人たちが同じ目線で街づくりに取  
り組んでいくための手段として、未来ビジョンづくりのプロセスを始めました。



未来ビジョンを策定するにあたっては、「誰のためのビジョンなのか」「誰が主役となって実現していくのか」について議論しました。その結果として、市民が今後口癖として語っていただけるような、市民が主役になるビジョンをつくりたいという結論を出しました。一部の市民のためのビジョンや、我々が主役のビジョンになってはいけない、そう考えました。

未来ビジョンづくりにあたっては、バックキャスト手法を採用することにしました。地域循環共生圏づくりにあたって、推奨されている方法です。



ですが、バックキャスト手法を採用するにあたって悩ましく感じていたのが、いかに市民の熱量を保つのかという点でした。

バックキャスト手法を採用した時のバッドシナリオはこうです。

バックキャスト手法を採用すると、実現したい未来に対して地域課題を洗い出すことになるわけですが、まずはこの課題の多さに衝撃を受けます。専門的知識のない市民の皆さんは、一筋縄では解決できないと感じ、難しく思い始めます。

さらに、これらの課題の上辺だけではなくて根本を解決するための未来ビジョンをつくっていくとなると、さらに難解になります。難解になると、わくわくしないので、主体的に参加する人が減り始めます。

結果的に、未来ビジョンづくりに責任を持つプラットフォームのメンバーだけが残り、結果的に市民が主役のビジョンではなく、私たちが主役のビジョンになってしまいます。

こうなることを回避するために、私たちは「価値創造型」企画設計手法を採用することにしました。ビジネス・ブレイクスルー大学の谷中先生の提案している手法からヒントを得て、私たちは、「チーズケーキ断面法」と呼んでいます。

具体的には、バックキャストイング手法を2階建てに切り分け、難しい部分は運営側が水面下で受け持ち、市民の方々には楽しく参画できて未来志向でアウトプットできる部分に参画いただくという方法です。

**市民の参加に対する心理的ハードルを下げる方法を考える**

「問題解決型」企画設計手法	「価値創造型」企画設計手法
<p style="text-align: center;"><b>主体：街のあらゆる市民</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 未来ビジョンを設定</li> <li>(2) 社会課題の把握 ⇒課題の多さ重さに、気持ちが落ちる</li> <li>(3) 課題解決の方向性の策定 ⇒誰が担う？という問いで、静まり返る</li> <li>(4) 事業テーマの設定</li> <li>(5) 具体的な事業の構築 ⇒専門性が必要で、話がなかなか進まない</li> </ol> <p>&lt;検討の結果&gt; 市民がビジョンを作る場合、「問題解決型」での企画運営は現実的でないという結論に至る</p>	<p style="text-align: center;"><b>2階 主体：街のあらゆる市民</b></p> <p style="text-align: center;">心が軽く、ワクワクして取り組みたくなる 「ビジョンづくり」企画</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 突き抜けたアイデア出し ⇒やりたいから・面白いからやるを重視</li> <li>(5) ビジョン名の選定 ⇒30秒で関与できる関りシロを設置</li> </ol> <hr/> <p style="text-align: center;"><b>1階 主体：七尾JC</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(2) 社会的課題を紐づけ作業（後付け）</li> <li>(3) アイデア分類整理作業</li> <li>(4) 課題解決の方向性の策定作業</li> </ol>

**「価値創造型」企画設計手法(1階で「問題解決型」も七尾JCが実施)の手法を採用**

26

**市民巻き込み型まちづくり事業構築のためのチーズケーキ断面法**

2つの型要素をバランスよく組み立て

**<地域住民参加者層（表面層）>**

**価値創造型（イノベーター型）思考によるレイヤー**

- ・「社会に対して新しい価値を創造し、提供する活動」であり、±0の状態から5にも10にも増やす活動姿勢である。
- ・現状の課題と向き合い、深刻なモチベーションで課題解決に取組まねばならない視点ではなく、ワクワクとしたモチベーションで、発想力と感性と状況適応力を活かし、柔軟な発想で、新たな価値や取組みを実施する思考法。

**<七尾JCコントロール層（中間層）>**

- ・地域住民層で発案されたワクワクをモチベーションとしたイノベーション手法に、その手法の結果解決できる地域課題や社会問題を検討し、根底層で設定している将来のゴールを目的とした説明を後付けし、社会的意義を持たせる。

**<七尾JCマインド層（根底層）>**

**問題解決型（コンサルタント型）思考によるレイヤー**

- ・「社会に存在する課題を解決する」ことを目的とした活動であり、マイナスの状態を±0に近づける活動姿勢である。
- ・設定した将来のゴールからバックキャストイングし、実現のために「今何を行わなければならないか?」、「クリアしなければならない課題の解決」に向けての具体的な取組みを実施する思考法。

(参考)「最高の織文型ビジネス イノベーションを生み出す4つの原則」, 谷中修吾先生

時間軸

NANA  
GIFT  
2040

27

例えば、ワークショップを開催すると、市民の参加者さんからはワクワク起点でのアウトプットが出てきます。アウトプット段階では未分類なこれらを、運営側でカテゴリー分けし、地域課題や地域資源、SDGsの各ゴールと紐づけていきます。



アナログな作業になるので、大体 8 時間ぐらいかけて整理をするという超泥臭いことを実はやっています。

**市民巻き込み型まちづくり事業構築のためのチーズケーキ断面法**

**問題解決型パートの視覚化作業の様子**



夕方からはじめ  
深夜1:30頃に  
完成

29

ここまで裏舞台の話しをしてきましたが、表舞台では地域のフォーラムを大々的に開催して、地域ビジョンへの市民の皆さんの巻き込みを行いました。

ワークショップでは、「2040年七尾や日本はどうなっているんだろう？」ということ、考えるためのインプットをして、その上でアウトプットフェーズに入りました。アウトプットとしては、七尾の未来新聞という形で各グループごとに発表をしてもらっています。

**【事業4：社会面】地域のあらゆる主体と共に地域の未来ビジョンを策定する「NANAO GIFT 2040」の開催**



33

最後は、先ほどお伝えしたチーズケーキ断面法で運営が黒子として整理したアウトプットをみんなで確認した上で、NANAo GIFT 2040として完成させています。

**【事業4：社会面】地域のあらゆる主体と共に地域の未来ビジョンを策定する「NANAo GIFT 2040」の開催**



34

この未来のビジョンを通して市民が共通の目標を持ち、地域全体が協力して持続可能性を高めていくことを目指しています。取り組みはまだ途中ですが、地域ビジョンは地域の未来に向けて前進していくための基盤となっています。

以上が、七尾市における取り組みのご紹介でした。

=====

地域循環共生圏セミナー2023 各回の、講演資料・動画・開催レポートはこちらで確認できます！

<http://chiikijunkan.env.go.jp/tsukuru/seminar/2023/#a-seminar-03>